１１．島崎城史跡

（1）城跡と中世の潮来

中世の潮来地域は大塚（だいじょう）氏の流れをくむ豪族で戦国時代の武将島崎氏が治めていました。その拠点が鹿行地方最大級の島崎城です。島崎氏は、戦国時代の１６世紀に入ると急速に勢力を拡大していきます。１５２２年 から１５８４年までに近隣の長山氏、麻生氏を攻め滅ぼし、鹿島氏、玉造氏を攻め、南方三十三館と称された鹿行地方の豪族のトップとなり、隆盛を誇りました。大永２年（１５２２年)に西方の長山城を攻略しますが、これに先立ち眼前の大台城西出城を増強したようです。この時期、島崎城の外郭部にあたる内野遺跡では建物が建ちはじめ島崎城は巨大化するなど、島崎氏の成長の様子がわかります。その島埼氏も豊臣秀吉による天下統一後の天正１９年(１９５１年)に 、島崎安定など南方三十三 館の城主たちは佐竹氏のいる常陸太田市に呼び出され、全員が謀殺され（「南方三十三館の仕置」）島崎氏は滅亡しました。

佐竹氏は常陸南部の新たな支配拠点として大台城を築き、完成までの間は島崎城を利用したのです。当時の粋を集めて完成した大台城は偉容を誇った事でしょう。しかし、 佐竹氏も関ケ原の戦い後秋田に移封され、当地における中世も終わりを迎えました。

（2） 島崎城

島崎城は、１．５km 西方に常陸利根川を望む、北から南へと半島状に突き出した台地上に築かれています。今は宅地や耕地となっているものの、全体的には保存状態が良好で、「根古屋」・「古屋」・「古宿」・「宿」・「芝宿」などの城下集落を物語る地名が残り、歴史学はもとより地理学・民俗学など多方面にわたって注目される城郭遺跡です。

島崎城の構成は内城・中城・外城地区に大別され、主郭と考えられているのは一の曲輪で、現在御礼神社が鎮座し、南側には櫓台とみられる大型の土塁が残されています。北側に位置する西二の曲輪、水の手曲輪、馬出曲輪とは、現在も２～４m の深さの空堀があり、これと土塁で遮断されていました。とくに馬出曲輪に面した土塁は大型で、櫓などの建物があったと考えられています。東二の曲輪の外周に土塁が設けられ、腰曲輪と呼ばれる小さな空間により、 北側の三の曲輪と繋がってていました。この二の曲輪までが内城地区で、城の中枢部です。中城地区にあたる三の曲輪は島崎城最大級の空間を誇り、北方に深さ１０m 以上で良好に残る大堀が掘られ、これにより北は外城地区になります。外城地区は 「根古屋」の地名から家臣団の屋敷が営まれていたと推測されます。

※曲輪（くるわ)とは

内外を土塁、石垣、堀などで区画した区域の名称です。構造の形態や位置などによって、二の曲輪、三の曲輪、内曲輪、外曲輪、馬出曲輪等の名称があります。 江戸時代には、本丸、二の丸、三の丸等の名称が付いています。

（3） 大台城

大台城（現、牛堀中学校）は、常陸の大部分を手中に収めた佐竹義宣が領国南部の要として築城した挑山期の城郭で、戦国時代に機能した長山城と島崎城との中間に位置しています。築城は義宣の重臣である小貫頼久が文禄４年（１５９４年)頃 から着手し、慶長元年(１５９６年)に 一応の完成 をみました。その後頼久は城代となって、佐竹氏行方領２６、３７１石の内の蔵入地約１万石を支配しますが、慶長７年（１６０２年)佐竹氏の秋田移封に伴って城は廃されました。城の機能は領国南端の「境目の城」であると同時に物流の拠点でしたが、僅か７年でその幕を閉じています。

（4）貴重な歴史資産

島崎氏は鎌倉時代から戦国時代にかけて、この地方を治めた豪族で、潮来市島須にある島崎城跡は、鹿行地方最大規模を誇る城郭跡です。全体的に保存状態が良好で、歴史学、地理学、民俗学と多方面にわたって注目されています。他にも牛堀地区には、いくつかの城跡があり、戦国時代のこの地域の様子を知る貴重な歴史資産となっています。 潮来市(旧、牛堀町)では１９８６年以来、島崎城をはじめ近隣の大台城跡(現、牛堀中学校)、 西出城跡など大規模な発掘調査が行われました。

（5）島崎氏は４００年もの長い間に渡ってなぜ生き抜けたのか？

島崎氏が島崎郷に住み着いた訳ですが、島崎郷はそんなに大きな領域ではありません。戦国時代の終わり頃には、行方全体が２万６千石といわれております。これを分け合う訳ですから、石高としてはそんなになかったと思います。その中で生き抜けたのは、他の大塚氏にも言えることですが、隣近所が親戚、同族ということが大きかったかと考えられます。やはり隣人は大事にしなければいけないということです。

それ以上に、この霞ヶ浦と北浦に挟まれた半島状の地形、外敵を寄せ付けづらいという、地理的な条件があったと思います。その地理的な条件というのは、人や物や文化などがもたらされる「水の道」が巡っていたことです。 外海と繋がっている無限の道がそこには広がっていたことは重要なポイントでした。戦国時代に島崎氏が急激な拡大を可能にしたのも、「水上交通路」とそれに連なる「津・港」を通して富を掌握出来たことが、行方地方の旗頭と呼ばれるまでに成長を遂げた大きな要因と考えられます。